

Eureka IX

六年制通信 No.29 令和3年12月24日(金)号

人事を尽くして…

早いもので明日から冬休みですね。年が明けて三学期が始まると、目前には共通テストが控えています。6年生の諸君はドキドキかな。何度も言いますが、受験というのは面白いもので実に平等な仕組みだと思えます。数多くの受験生を見てきましたが、ちゃんと勉強した生徒が受かるようにできています。受験は、定期テストと違って一夜漬けは決してできませんからね。やはり実力が正しく出ます。

勉強をしてこなかったら夢を引き下げるしかなくなります。目標を変えて、本当はこっちに行きたかったなどと自分に言い訳をしながら、あるいは自分をだましながらか、夢を変えていくしかなくなります。それって、つまらないことだと思いませんか。

夢は手を伸ばした5センチ上にある、だから諸君、背伸びをして勉強したまえ。

「人事と尽くして天命を待つ」、これは私の好きな言葉です。そして最も難しいことだと思っています。人事を尽くすというのは、できる限りの努力をすることです。あとの結果は天に任せる、ここが大切なところで、どんなに努力をしようと望んだ結果になるとは限らないわけです。天命ですから私たちの力でどうなるものでもない、そこを認める、そこを認めた上で、人事を尽くすことが肝要なのですね。意に添わぬ結果はもちろんあり得ます、しかし、人事を尽くすこと、それしか自分にはできないのですから、そこさえ精一杯していればどんな結果も認められる、この諺はそう言っているのですね。どんな天命も自分の選択したことだと思えるためには、できる限りの努力をしておくこと、つまり人事を尽くすことです。難しいけれど、頑張りましょう。

ただし、運を味方にすることはできます。運命の女神が微笑むような生き方があると昔の人は言っています。それは、人生にいいイメージを持つことです。そしてプラスの言葉を口に出して試みるのが大切なのだそうです。私は自分の中高の時代、複数の先生方に同じ話を聞きました。「プラスのこともマイナスのことも口から出る、だから「吐」という字は口へんにプラス(+)-マイナス(-)と書く。でもそこからマイナスを消していけば「叶」という字になる。願いを叶えるにはプラスのことを口に出して生きることだ」、だから口にするならポジティブな言葉にしてください。こういう話はいつごろできたのか知りませんが、昔からあるのですね。言葉遊びのようで、いかにも武田鉄矢が好きそうな話ですが、一理あると私も思えます。大体いつもゆったりとした笑顔でプラスのオーラを出している人と、ため息ばかりついているマイナスのオーラの人とでは、どちらに幸運の女神が微笑むか、わかりますよね。ですから諸君も愚痴など言わずポジティブなことを口に出して生きてみてはいかがでしょうか。

冬休みのおすすめ

- ・村上智彦 『医療にたかるな』 (新潮新書)

あの夕張メロンで有名な夕張市が財政破綻したのは15年程前ですかね。当時は結構なニュースになっていましたよ。当然ながら夕張市立総合病院のスタッフも大量に辞めたわけですが、そのあとを受けて病院の再建に尽力したのが著者です。マスコミの論調は「夕張市民は犠牲者」という、これまたいつものステレオタイプでしたが、村上さんははっきり「市民も悪い」と言っています。この本のタイトルからして過激ですが、中身はもっと過激です。この人の講演を聴いたことのある人がどこかで書いていましたが、村上さんの口癖は「冗談じゃない」だそうです。頭が痛いくらいで、しかも歩いて病院に来てCT検査を希望するのは、そして実際に撮ってもらえるのは世界で日本だけだ、冗談じゃない、と。毒舌も面白いのですが、結構ね、目からうろこの事実を教えてもらえます。こんなに大胆に歯に衣着せずに書いて大丈夫かと心配になりましたが、村上さんは白血病で亡くなられたのですね。残念です。読後私は、この人が教育関係者ならこんなことを言っただろうにと楽しく空想してしまいました。

さて、冬休み。そうだなあ、伝記を読んでみたらいかがでしょう。

- ・渡部昇一 『忘れてはならない日本の偉人たち』 (致知出版社)

著者は「知の巨人」と評された方ですね。本書では20名ほどの偉人が登場しますが、最後の方に東郷平八郎に並んで佐久間勉を取り上げておられます。君たちはもちろん君たちの親の世代、そして私の世代でもこの名前を知っている人は極めてまれでしょう。佐久間艇長といってもわからないと思います。私の尊敬する米内光政と兵学校の同期ですが、そんなことはいよいよ誰も知らないですよ。明治43年佐久間艇長の潜水艇が事故で沈み、乗組員全員が殉職します。私はこの人の遺書を何度も読み返しました。そして、こういう立派な日本人がいたということに誇りを感じています。

あと三冊紹介しておきます。

- ・司馬遼太郎 『新史太閤記(上)(下)』 (新潮文庫)

司馬作品は、幕末は『竜馬がゆく』か『翔ぶが如く』、明治なら『坂の上の雲』、そして戦国時代なら『新史太閤記』から入る人が多いのではないのでしょうか。豊臣秀吉は稀代の「人たらし」であったと、司馬さんは言っています。彼はどのようにして人心掌握術を身につけていったのか。司馬さんの興味もそこにあるように思います。

- ・植村直己 『青春を山に賭けて』 (文春文庫)

一時映画やドラマになったのですが、もう名前も聞かなくなりましたね。日本人で初めてエベレストに登った人です。マッキンリーでしたか、下山中に連絡が途絶え、いまだに見つかっていません。北極点にも犬ぞりで行っています。冒険家です。

- ・小澤征爾 『ボクの音楽武者修行』 (新潮文庫)

音楽つながりで小澤の先生の生涯を描いた中丸美繪の『嬉遊曲、鳴りやまず 斎藤秀雄の生涯』もおすすめですが、これ、本屋さんにあるとは思えないなあ。ちなみに斎藤さんのお父上は斎藤秀三郎という、日本で一番英語のできたお方です。

BGMは 辛島美登里 の サイレント・イブ でした…。